

探訪 北の風景 34

ナウマンゾウ化石や温泉、公園で地域づくり

十勝管内幕別町忠類地区

萩本和之

「すごい！有原さんの右上腕骨みたいだ。これ撮って！」と、ナウマンゾウの化石を観て、はしゃぐ日本ハムの大谷翔平選手の姿。昨年末から新年にかけてテレビで放送され、一躍有名となったのが十勝管内幕別町忠類地区にある「ナウマン象記念館」。昨年同町の応援大使だった大谷選手と市川友也捕手は、日本一となった後の11月21日に初めて同町を訪問。記念館そばの「ナウマン温泉ホテル アルコ236」で、ユリ根のかき揚げや「どろぶた」のしゃぶしゃぶなど忠類産食

材を使った昼食に舌鼓を打った後、記念館を見学した。

忠類地区は旧忠類村で、2006年に幕別町に編入された。人口2千人弱の地区が全国的に注目を浴びるきっかけとなったのはナウマンゾウの化石。1969年（昭和44年）農道工事現場で臼歯が偶然見つかり、3度の発掘調査で全骨格の70〜80%にあたる47個の化石骨が発掘された。約2〜3万年前の新生代更新世後期まで日本列島や東アジア大陸に生息していた、といわれるものの、ほぼ1頭分の化石発見は世界的に珍しく、復元化石は22体複製され、日本のほか、海外の博物館にも展示されている。

記念館は1988年（同63年）帯広市から同管内尻尾町に向かう国道236号線沿いにオープンした。全長4.3メートルのナウマン象の復元骨格を中心に、発見にまつわるエピソードや、発掘までの感動をパネルや映像、さらに発掘品を分類して展示、解説している。

建物は凝っており、上からみるとナウマンゾウの姿をイメージしたデザイン。中央の丸いドームの部分が胴体、四隅の展示室などが足、正面入口が頭部。玉石を埋め込んだ外壁は象の肌で、「時の道」とよばれる入口までの長い歩道は鼻と牙をイ



住民らの願いで採掘され、住民が出資した会社が運営する「アルコ236」。泉質はアルカリ性単純温泉。アルコの語源はイタリア語で弧・アーチを意味、236は国道236号沿いから付けられた。周辺にはキャンプ場や忠類白銀台スキー場などもあり、見渡すと遠く日高山脈の絶景も一望できる絶好のロケーション

メージしており、第1回北海道建築賞に輝いている。屋外にはナウマンゾウ親子像の生体復元模型も。

記念館そばの温泉はバブル期の1989年（平成元年）のふるさと創生資金（1億円）をもとに91年忠類丸山の麓で温泉探査を実施。約7カ月かけて温泉ボーリング探査を行った結果、翌年2月にアルカリ性単純泉が自噴した。ボーリング当時総務課長で最後の村長、遠藤清一さんは「村民の総意で探査を始めたが、難航しハラハラしていたので、自噴した時は本当に安心した」と振り返る。2年後には総事業費1億円を投じて、源泉からパイプラインで圧送して「アルコ236」を開業した。

両施設の傍には「道の駅・忠類」のほか、広さ





大迫力のナウマンゾウの骨格化石。年齢は50歳。ほぼまるまる一頭発掘に成功したのは世界で初めての偉業なので、発掘作業時には全国から関係者や見学者が1万人以上が詰め掛け、今でも記念館には年間1万3千人前後は見学に訪れる



記念館外にあるナウマンゾウ親子の生体復元モニュメント。「冬は寒いだろうから」と08年から毎年匿名の大樹町民からマフラーとブランケットが贈られ、今冬も昨年12月2日忠類工房代表の五十嵐豊子さんと記念館職員らの手で取り付けられた。3月下旬まで=幕別町提供

9万平方メートルの「ナウマン公園」も。パークゴルフ発祥の地らしく「全国一難関」と評判のコースを含めて計2コース、36ホールが完備されているほか、キャンプ場やバーベキューハウスが設けられている。さらにナウマン象をイメージし、長さが約40メートルもあるローラースライダーなど大型遊具があるが、「もつとゆつたりと公園周辺で遊んでほしい」（西山暁啓同町忠類総合支所建設係長）と新年度には親水池に向かって滑る「ウォータースライダー」（高さ3m）を設ける。また記念館裏手の忠類白銀台スキー場では2月19日ダンポールで作成した個性豊かなオリジナルそりが出場する第34回忠類ナウマン全道そり大会が催される。

△はぎもと かずゆき・元大学教員▽